

建築家ウイトゲンシュタイン⁽¹⁾

Wittgenstein als Architekt

須 田 朗

要 旨

ウイトゲンシュタインがウィーン中心部に建てた「ストンポロウ邸」は一切の装飾を排した簡素な建物である。アドルフ・ロースの建築思想の影響下でなされたこの建築は、科学的言語から曖昧さを排して形而上学を無効にする『論理哲学論考』の言語論に呼応する。ウイトゲンシュタインはこの主著執筆後に陥った精神の危機を、この建築を通じて脱して行き、後期の「言語ゲーム」の哲学に向かう。言語の意味は使用にあるとする後期思想の誕生に、存外、この建築作業が一役を買っていたのではない。世紀転換期ウィーンの精神状況を背景に前期から後期への移行を考える。

キーワード

ウイトゲンシュタイン、ストンポロウ邸、『論理哲学論考』、写像理論、言語ゲーム、アドルフ・ロース

——アイスバーンに入ってしまった。摩擦がないので、ある意味で条件は理想的だが、しかしだからこそ歩くことができない。われわれは歩きたいのだ。そのためには摩擦が必要だ。ざらざらした地面に戻ろう！

(ウイトゲンシュタイン『哲学探究』第一〇七節)

どちらかと言うと、構築するよりも、むしろ分解する哲学者。そんなイメージのワイトゲンシュタインだが、その彼が文字通り設計し建築した家がウィーン旧市街にひっそりと建っている。ストーンボロウ邸といわれる建物である。

一 ストンボロウ邸とはなにか

それは、ワイトゲンシュタインが姉マルガレーテのために設計施工した家である。この姉はストーンボロウ氏に嫁したので、この建物は今日「ストーンボロウ邸」と呼ばれている。ウィーンの中心部（いわゆるリンク）近くのクントマン通り^{ガッセ}に建築当時のままで建つこの家は、現在ブルガリア大使館付きの文化施設となっていて、ときどき展覧会などが開かれている。筆者は二回のウィーン在住中たびたびこの建物に見学に赴いた。そして一度は、普段公開していない二階まで入れてもらい、廊下などをカメラに収めてきた。この家、ひと目見てとにかくすっきりしたきわめてシンプルな建物という印象を受ける。外壁は白く装飾は一切ない。縦長の長方形の窓が印象的である。しかしどこか見たことがある、というか、今日日本でよく見かける建物に似ているのだが、どこかちよつと違う。それがどう違うのか、建築を専門に研究していない身なので詳しくは分からないが、言えることもある。ウィーンはよくバロック都市と呼ばれる。都心部、とくにリンクと呼ばれる環状道路の周辺や内部はどこを見ても、教会でも宮殿でも一般の建物でも、ひどくごてごて飾り立てている。建物に対するこの装飾癖は、形を変えて今日まで連綿とつづいている。オットー・ワグナー作「カールスプラッツ地下鉄駅」、ウィーン分離派の拠点となった「分離派展示館」^{ゼツェンホフ}、最近ではフンデルトバッサー作の市営住宅など、一九世紀末から二〇世紀にかけて造られた建物にもバロック

時代に負けない華麗な装飾が施されている。そのなかにあつてウィトゲンシュタインの造つた建物は実にシンプルなので、かえつて目立つのである。⁽²⁾この建物が完成したのは一九二八年のことだが、おそらく当時はその異様さ斬新さは相当目立つたのではないか。哲学者であるウィトゲンシュタインがなぜ建築といふまたく専門外の仕事に手を染めたのか、しかもどうしてそんな斬新な建物を造つたのか。ウィトゲンシュタインの哲学と建築を比較しながら、この問題にアプローチしてみたい。

二 『論理哲学論考』⁽³⁾

まずは二〇世紀最大の哲学書のひとつと言われる『論理哲学論考』である。この本はちよつと変わった体裁で書かれている。通常哲学書と言うと、「これこれだから、こうである。しかしこういうこともあるのだから、こうなるのだ。なぜなら云々」といった結構七面倒くさい論証やかなり回りくどい議論があるものだが、この本には、いかにも天才が靈感で書いたように、一切、論証やくだくだした説明がない。極度に圧縮されたテーゼのようなものが、次々と書き連ねられているだけである。ところが、その断片的な数行の言葉がきわめて説得力があり、何度も咀嚼しているうちに段々味が出てくる。ほかのひとが一〇行もかけて述べることが、一、二行で語られている。つまり余分なことは一切書かれていないのだ。これらの文章には一から七まで番号が打たれていて、それがただ並んでいる。ちよつど幾何学の定理のようなものが証明ぬきで並んでいると考えればいい。ではその定理は七つしかないかという、そうではない。一なら一にさらに小項目のような形で関連する文章が一・一の番号で並んでいる。さら

にまた、一・一の文章に関連する断片が一・一一、一・一二のようにつづいている。小数点以下の文章は下のケタになるほど重要度が下がる。これは幾何学の系のようなものと考えたらいい。この文体にすでに彼の思想が現れている。だからだと形容詞や副詞を並べたり接続詞を多用したりするいわば装飾過多の文章を、ワイトゲンシュタインは生涯嫌っていたらしくほとんど書かなかった。さてその内容だが、この本のなかにきわめて有名な言葉がある。それは第七番の番号が付いた文章、つまり最後の項目で、これには小数点以下の小項目は付いていない。ということはこの本のいちばん最後で言われている言葉だということになる。「語る事ができないものについては、沈黙しなければならない」というのがそれである。

ワイトゲンシュタインの哲学のやり方は、言語批判、つまり言葉にかんする批判という方法である。言葉には大きく分けて二種類ある。ひとつは、科学とか、もつと広く学問といつてもいいのだが、科学者、学者が使うべき言葉。もうひとつは、それ以外の言葉。真・善・美ということがよく言われる。真は科学が追求するもの、善は政治や宗教を含めた広い意味での倫理や道徳が追求するもの、美は芸術が追求するものである。このうち科学者の使う言葉は、真つまり、真理を語っている、あるいは語ろうとしているものである。これが第一の種類の言葉だ。これに対して、たとえば「汝の隣人を愛しなさい」という道徳の言葉や、「神を信じなさい」とか、さらには詩人や小説家や童話作家たちが語る芸術の言葉が第二の種類の言葉である。この第二の種類の言葉をいま「ファンタジーの言葉」と名づけておこう。第一の種類の言葉、科学者の言葉のほうは、実際に存在しているものを写すための言葉、難しく言えば「写像の言葉」である。これに対してファンタジーのほうは、何かを写しているわけではない。

さて学問の言葉だが、写すと言つても、実際に存在するものをそのままコピーするのではなく、言葉は一種の記

号であるから、記号で写すということになる。たとえば実際に存在する街を地図で表す。これもいわば写すことである。あるいは、実際に聞こえている音楽を楽譜に写しとる。あるいは実際の空模様を写す天気図でもいいだろう。さて、地図や楽譜のなかにはいろいろな記号が使われている。たとえば地図のうえの「北」を表す例の矢印とか、郵便局を表すポストマーク、半音上げたり下げたりするシャープやフラット、天気図のなかの晴れや曇りや寒冷前線などの記号。これらの記号と同じことをやっているのが、科学で使われる言葉だというのである。つまり科学の言葉は、実際に存在しているものこと (Wirklichkeit) の様子をそれぞれの科学に特有の記号で写しているわけである。たとえば物理学で使う言葉は物理現象を写し表し、化学の言葉 (H₂O などの化学記号) は実際に起こる化学反応を写し表し、生物学の言葉は生命活動を表し、経済学の言葉は経済現象を、心理学の言葉は人間の心理状態をそれぞれ写し表している⁽⁴⁾。

ところでときに、写しているその言葉が実際の様子を間違えて写す場合がある。もう一度地図を例にとると、郵便局は本当は警察署の左隣にあるのに、地図のうえで警察署の記号の右隣に郵便局の印を書き込んでしまう、ななてことはありうる。それと同じように、科学の場合にも間違えて写すことはある。しかしそれは、記号の組合せ方を間違えただけである。こういう場合、間違えて地図に書き込んだ人を実際にその街のその場所に連れていって、確認させて訂正させることができる。この場合写し間違いを訂正することが、原則としてできるわけである。科学の場合もこれと同じである。このように訂正してさらに訂正してできるだけ正確な地図を作ること。科学の進歩とは、いわばそういうものだと考えていいだろう。たとえば昔の天文学では地球が止まっていて、太陽が動いているというような地図を描いていた。それがだんだん正確に宇宙の状態を写すようになって、いまでは地球は自転しな

がら太陽のまわりを回っているというふうに実際の様子に近づいてきたわけである。いま、科学の進歩は科学のなかで使われている記号をできるだけ正確にしていこうとことだと言ったが、そうだとすれば、たとえばわれわれがよく口にする言い方、(太陽が東から昇り西に沈む)という言い方も本当は正確な表現ではないことになる。これではまるで太陽が地球のまわりを回っているようである。われわれがつね日頃使っている言葉は不正確である。科学のなかからできるだけこうした不正確な言葉を排除していき、できるだけ正確な言葉で本当の姿を写すことが真理の追求のためには必要だと、ウイトゲンシュタインはこの時期考えていた。たとえば先程の日の出と日没の言い方は、正確には「地球は自転するが、その地球上の一点点にいる観察者には、太陽が東から昇り西に沈むように見える」と言うべきである。さてこのように、科学は言葉を正確にする方向へ向かって日々進歩しているわけで、これらのさまざまな科学の使う言葉、それも正しい言葉の全体が学問の全体ということになる。

ところが科学とは別に、西洋には昔から、たとえば神学とか形而上学とか哲学といった学問がある。これらの学問は原理上目に見えないもの、感覚で捉えられないものについて何かを語っているわけだが、しかもそれでいて、「自分たちの使う言葉は、文学のようなファンタジーの言葉ではない」と主張している。つまり自分たちは立派な学問だといっているわけである。この自称学問は、「神」だとか「この世ではない別の世界」だとか「世界全体を超越する主観」だとか、「身体から独立の魂」だとかという言葉を使う。しかしこういう言葉はいったい何を写しているのだろうか。ウイトゲンシュタインによると、実は何も写してはいないのである。

そのことをウイトゲンシュタインは、これらの言葉には「意味」がないという。ここで注意しなければいけないことは、「意味がない」ということと「間違えている」ということは同じではないということである。ウイトゲンシ

ユタインは、「神」という言葉（記号）が間違つて使われているということを言おうとしているのではない。神という言葉は、むしろ記号ですらない。記号は何かの記号、何かを写しているもの、あるいは何かを指しているものがある。ポストマークは郵便局の記号である。郵便局を指している。しかし神という言葉、つまり神という記号には指すものがない。

このように記号の意味が分からなくとも、そこに行つて地図と現場を突き合わせてみると、その記号が何を意味しているかが普通はわかるのだが、神という記号、この世ではないあの世などという記号が何を意味しているかは、どこへ行つて調べればいいのかさえ見当がつかない。つまりこれらの記号は何か実際に存在しているものを写しているわけではないのである。そのような言葉でたとえ何が語られていても、そうしたものは科学の言葉とは言えない。別の言い方をすれば、神だとか、あの世だとか、靈魂だとかというテーマは、そのような意味で、つまり写すという意味では語ることができないものである。語ることができないものについては、語つてはいけない、つまり沈黙しなければならぬ。つまり神等々について、まるで学問をしているかのような外見を装つて語つてはならない。そう、ウィトゲンシュタインは述べているのである。

しかしなぜウィトゲンシュタインはそんなことをわざわざ言うのだろうか。神が存在することを否定する程度のことなら、すでに一〇〇年も二〇〇年も前に啓蒙主義者や無神論者がとうの昔にやつてしまつてゐる。しかしウィトゲンシュタインは、けつして無神論を主張しようとしたのではない。彼は無神論者に対しても反対しただろうと思う。彼ら無神論者たちは神なんか存在しないと語つてゐる。神がないというのが正しいのだ、真理なのだと言つてゐる。しかしこうした無神論者の言葉は、有神論者と同じく神のことを語つてゐる。無神論者は神という言葉

に何か意味があるかと思ひ、その言葉が何かを指しているということを前提としている。しかしワイトゲンシュタインは、神という言葉は記号ではないと考える。もっと正確に言えば、ものを写すための記号ではないのである。むしろそれはファンタジーの言葉なのである。だからたとえば、守護霊や背後霊が本当にいるかどうかを科学で調べてみる、たとえば赤外線カメラで確かめてみようというような態度は、そもそもナンセンスなのである。それはちょうどハムレットなる人物が、いろいろ調べてみたが、デンマークの宮廷には歴史上実在しなかった、だからシェークスピアは間違っていると非難するようなものである。「ハムレット」という言葉で問題になっているのは、その人物が歴史上いたかいないかではない。そもそも、いるともいないとも言えないものなのである。なぜならそれは写像の言語ではなく、「ファンタジー」の言語だからである。⁵⁾

さて、ワイトゲンシュタインが「語りえないものについては沈黙せよ」ということと言いたかったことは、結局なんだったのか。それは、言語の混乱混同を解決することだった。これまで西欧の思想では科学のなかに科学とは無関係な言葉が混入されてしばしば使われていた。また逆に本来ファンタジーであるはずのもの（たとえば宗教や倫理）のなかに疑似科学の言葉が混入していた。これをきちつと分けなければならぬというのである。批判(Kritik)とつう言葉は、「分ける」(krüen = krüen)というギリシヤ語からきたものだが、こうした言語の錯綜状態をきちんと分けて整理すれば、大方の哲学の問題は解決される。いや、というよりもむしろ、そもそもはじめから問題自体が存在しなかったということが判明するということである。『論理哲学論考』から一ヶ所だけ引いておこう。

哲学的なことがらについて書かれてきたほとんどの命題や問いは、誤りではない。無意味なのだ。したがっ

て、われわれはこの種の問いにおよそ答えるすべを知らず、ただそのナンセンスであることを立証できるだけである。哲学者たちのかかげる問いや命題のほとんどは、われわれが自分たちの言語の論理を理解していないことに基づく。⁽⁶⁾

三 ウイトゲンシュタインの実生活

さてワイトゲンシュタインは「語りえないもの」つまり宗教、倫理、芸術、哲学上の諸問題（たとえば近世哲学で盛んなされた認識論）については、何も語るなどというのだが、ではワイトゲンシュタインはぜんぜん宗教心をもっていないなかったのか、倫理感が欠如した男だったのか、芸術に無関心だったのかというところではない。このころのワイトゲンシュタインの実生活を見てみれば、それはすぐに分かる。教会にこそ熱心に行かなかつたが、たとえば第一次世界大戦でイタリアの捕虜収容所にいたころは聖アウグスチヌスの『告白』や福音書を熱心に読んでいた。また身を以て宗教の教えを実践したと思われる節もある。トルストイやドストエフスキーの愛読者だった彼は、トルストイの福音書の解説を読んで感動し聖書に書いてある行為を、周囲の反対を押し切ってそのまま実行してしまう。聖書には裕福な人に「財産を捨てて、わたしに従いなさい」（マタイによる福音書十九章二十一）とキリストが言ったとあるが、この教えを説きまた実践しようとしたトルストイ（一八八五年に私有財産を否定しようとして家族、とくに妻と対立した彼）をみならつたらしい。ワイトゲンシュタインは、父の没後一年経つた一九一四年に莫大な遺産をほとんどすべて貧しい縁者、さらには学者や芸術家に匿名で寄付してしまう。その基金はやがて画家のオスカ・

ココシユカ、建築家のアドルフ・ロース、詩人のリルケやトラークルといった同時代の文化人たちの生活を助けることになった。⁽⁷⁾

またワイトゲンシュタインは倫理感が人一倍強かったと言われる。彼の家庭はユダヤ系だが、その倫理感はどこらかというとプロテスタント的（つまり禁欲的）だった。ワイトゲンシュタイン自身もきわめて禁欲的内面的で、自分に厳しい倫理を信奉していた。結婚すらしなかった。もつとも、結婚しなかったのには恐らく別の理由がある。実は彼はつねにホモセクシャルに対する欲求をもっていたようで、実際に同性愛者だったという専門家もいる。第一次世界大戦終戦後ワイトゲンシュタインは小学校の先生になりたくて、現在ストーンボロウ邸が建っている向かいに新しくできた教員養成所に通うために、ひと頃その近くに住んでいた。実はこの場所からは歩いてすぐドナウ運河にかかる橋に出られるのだが、その橋を渡ると対岸はプラターという広大な公園になっている。「第三の男」という映画がある。アントン・カラスのチャターで音楽のほうが有名になった映画だが、あの映画で死んだはずの第三の男オーソン・ウェルズ扮するハリー・ライムとジョセフ・コットン扮する親友ホリー・マーチンスが初めて会うのがプラターの一角にある遊園地の大観覧車である。この遊園地はいまでもウィーン市民の憩いの場所で、休日などごった返しているが、この遊園地の奥に広大な、森と言ってよいほどの公園が広がっている。昔は宮廷の狩猟場だったその深い森は、気持ちのいいハイキングコースになっているが、夜はいまでも犯罪者の隠れ家になったり、浮浪者や同性愛者の溜り場になっているとのこと。ある学者によると、ワイトゲンシュタインはこの時期何度となくここに通ったそうである。しかし実際にそうした同性愛行為があったかどうかは専門家の間で議論の余地がある⁽⁸⁾が、ワイトゲンシュタインがそうした欲求をつねに感じていたのはどうやら事実らしい。しかも反面でそうした欲

求をもつ自分を自分で激しく非難する毎日だったようである。彼は自己嫌悪のため絶望して何度も自殺しようとした。昨今では同性愛は男性にしろ女性にしろ、市民権を認められているようだが、LGBTなどという概念には無縁の一〇〇年も昔の時代であるし、人一倍倫理感の強い彼のことだから、この自己嫌悪は相当のものであったろうと思う。ウイトゲンシュタインは、何度も周囲に自殺をほのめかしていたし、彼が第一次世界大戦に積極的に従軍したのは、自分の死に場所を求めたためだったとも言われている。

このようにウイトゲンシュタインは倫理や宗教については、どうでもいいと考えていたわけではなく、むしろ彼にとってはきわめて重要な問題だったのである。重要だからこそ理論として語るのではなく、むしろ黙って実践する。倫理や宗教は自分の体で実際に実践しなくては何もならないということが「沈黙しなければならない」という言葉の背後にはあったのである。⁹ウイトゲンシュタインのこの倫理観は、キルケゴールの「単独者」とか、「実存」といった考え方にきわめて近いと思う。実はこのころヨーロッパの思想界ではキルケゴール・リバイバル（埋もれていたキルケゴールの思想を再評価しようという動き）があつて、そうした思想界の雰囲気もウイトゲンシュタインのこうした「黙って実行」型の考え方に影響を与えている。ウイトゲンシュタインと実存主義は案外近いかも知れない。¹⁰

いずれにしてもウイトゲンシュタインはこの時期、倒錯的な性に悩みながら、きわめて質素な生活を送っていた。そして経済的にはほぼ無一文になった彼は、学問のほうではもはや哲学の研究もやめてしまう。それはなぜか。『論理哲学論考』で哲学のすべての問題を整理してしまつたからである。つまり哲学の問題はすべて言葉の混乱から生じた不必要な問題だったという結論に達したのだから、哲学では語るべきことがなくなつてしまつた。哲学では口をつぐんで、もっぱら実践に移ろうとしたのである。

四 哲学の自殺

ウイトゲンシュタインがもはや哲学を語らなくなったのには、次のような論理的必然性がある。論理的必然性などと言うと何か難しく聞こえるが、要するに彼の哲学自身から当然出てくる結果ということである。

語りうる唯一の言葉が科学の言葉、写す言葉だとすると、ウイトゲンシュタイン自身が『論理哲学論考』で語った言葉、彼自身があの本で書いている言葉も、実は意味のない言葉だということになる。というのもウイトゲンシュタインもあの本で何かを写しているわけではないからである。たとえば私が眼にしているある色を「赤」とか、「青」という言葉で言い表わすこと、つまり色の言葉に写すことはできる。ところが、その色とこの「赤」という言葉の間の関係は色(1)の言葉つまり「赤」とか「青」とかいう言葉に写して表わすことができない。それはそうである。赤いスカートとか、青い空とか、黄色いハンカチとか言うことはできても、赤い関係とか、青い関係とか、「関係が黄色い」とか言うことはできない。関係には色はないからである。つまり私が眼で見ている色と「赤」という言葉の間の関係は、その当の色の言葉（「赤」、「青」等）で語ることができない。語ることができないものについては沈黙しなければならぬ。それと同じ事情が、ウイトゲンシュタインが『論理哲学論考』を書いたその当の言葉にも当てはまる。つまり実際に存在するものとそれを写す科学の言葉の間に張りめぐらされた関係（写し・写される関係）それ自身も、科学の言葉で語ることができないもののひとつだということになる（『論理哲学論考』四・一二を参照）⁽¹²⁾。さてそうすると、どうなるのか。ウイトゲンシュタインは、『論理哲学論考』でこの関係のことを盛んに語っていた

のではないか。彼のその言葉は何かを写す言葉ではない。その言葉は、科学の言葉とは少しレベルの違う言葉、科学の言葉に関する哲学の言葉である。こうした言葉を使つてはならないはずであった。したがってウイトゲンシュタインは、もう何も哲学では語らなくなってしまった。それゆえ「語りえないものについては沈黙しなければならぬ」という結論をもつ『論理哲学論考』という本は、自分で自分の首を絞めているような著作なのである。ウイトゲンシュタインは、哲学のうえでも自殺行為をはかっていたわけである。なにしろ彼はこう述べているからである。

哲学の正しい方法とは本来、次のごときものであろう。語られうるもの以外なものも語らぬこと。ゆえに、自然科学の命題以外なものも語らぬこと。ゆえに、哲学とはなんのかかわりももたぬものしか語らぬこと。——中略——これこそが、唯一厳密に正しい方法であるだろう。⁽¹³⁾

五 建築へ

さてウイトゲンシュタインは哲学では語ることがなくなったので、もっぱら実践に専念しようとした。ではウイトゲンシュタインは何を実践したのか。ハプスブルグ王朝が崩壊してオーストリアに共和制ができると、学校教育を民主的なものに改革しようという運動が高まってくる。ウイトゲンシュタインはこの教育改革運動に参加すべく、教員養成学校に通い小学校の先生の免許をとって、早速一九二〇年から田舎の小学校で教師になる。教員生活は六

年間もつづく。先生としては生徒に比較的人気があったようである。この間『小学生のための国語単語辞典』（子供たちの話し言葉や方言でも引けるといふユニークな辞典¹⁴）を作って出版したりする。ウイトゲンシュタインが生前出版したのはこの辞典と『論理哲学論考』だけである。考えてみればそれで、今世紀最大の哲学者と言われるのだから不思議である。ところがあまりに生徒の自主性を尊重した革新的な教育方針をとったので、旧弊な教育を望む農民の父母（保護者）には理解されず、結局は生徒に体罰を与えたという口実で彼は裁判所に訴えられてしまう。裁判結果は無罪になるが、その間に精神鑑定までさせられ——なにしろ変人という印象を周囲に与えていたから——いろいろなごたごたがつづいて、ウイトゲンシュタインはついに田舎教師に嫌気がさして、自分から一九二六年に退職する。失意のうちにウイトンに戻ってきたウイトゲンシュタインは俗世間に嫌気がさしたのか、修道士になろうと、やがてウイトン近郊ヒュッテルドルフの修道院で修道士見習い兼家庭師の仕事をして暮らしていた。しかしウイトゲンシュタインの精神状態はこの間も、失意と同性愛への欲求とそうした自分の欲求に対する自己嫌悪とで依然としてかなり不安定であった。弟の神経症を見るに見兼ねた姉のストンボロウ夫人は、弟をなんとか救ってあげたいといろいろ画策する。心理学を勉強しフロイトとも親交があったこの姉は結局、弟を何かに集中させるべきだと思ひ、そこで一九二六年に自分の新しい家の設計を建築家パウル・エンゲルマンとともに作ってほしいとウイトゲンシュタインに依頼する。このエンゲルマンは、前述のアドルフ・ロースの弟子である。ロースはウイトン分離派の第二世代に属する建築家で、クリムトやオットー・ワグナーに反対したひとである。その著書『装飾と犯罪』のなかで「あらゆる装飾は犯罪だ」という考え方を述べ、それを建築や家具その他のデザインで実践した人でもある。ウイトゲンシュタインはロースと面識があった¹⁵。このロースの紹介で一九一六年以来エンゲルマンと知り合いになり

友人にもなる。⁽¹⁶⁾ ストンボロウ邸の建築は、最初はワイトゲンシュタインがエンゲルマンを手伝う程度だったが、元来物を作るのが好きなワイトゲンシュタインはこの建築に段々とのめりこんでいき、最後は彼ひとりですべて仕上げるようになった。彼はすでに学生時代にノルウェーにひとりですべて小屋を作ったことに住んでいたこともあった。またウィーン市役所の住民票の職業欄には自分の職業を建築家として登録していた時期（一九三三年から一九三八年まで）があるくらいで、よほど建築が好きだったに違いない。ストンボロウ邸建築に際しては、細部にまで病的なほどこだわり、毎日現場に通って細かい指示を出していた。ミリ単位の精密度を要求したために、工事がかなり難航した。もう工事がかなり進んで完成間近になったとき、サロンの天井の高さを約三センチ高くすることを要求して譲らなかつたなどという逸話も残っている。こうして精密機械のような家が二年という歳月とかなりの費用をついやして、ようやく一九二八年に完成する。

六 ロースとワイトゲンシュタイン

筆者はウィーンを中心街、王宮のバロックふうの建物の真ん前（ミヒヤエル広場）に堂々とそびえたつロースハウス（ロース制作）の前をしょっちゅう通っていたしロースが室内を設計したカフェ・ムゼウムにも何度となく通ったことがあるので、ロースの建物はよく見慣れているが、ストンボロウ邸はたしかにロースと同じコンセプト（すなわち装飾の排除）で造られている。ただロースハウスよりもっとシンプルでそっけない。そういう印象をもった。とにかく、とことんロースのコンセプトを突き詰めていくと、こうなるのではないかと思われるのだが、しかしこ

これは門外漢なのでよく分からない。ただ、たとえばトゥールミン、ジャンニクの共著『ウイトゲンシュタインのウイーン』のなかに興味深い記述があり、多少得心した。ウイトゲンシュタインの哲学とロースの建築と、それともうひとりシェンベルクの音楽には共通点があつて、ウイーンで当時活躍したこの三人は、いずれもカール・クラウスというウイーンの文学者・文芸批評家の精神を受け継いだいわばクラウス主義者である。彼らは、いずれも虚飾を排して対象がもっている論理に忠実に従おうとする点でクラウスの批判精神を受け継いでいたと指摘している。ロースは家具や建物の装飾過多を排除して、それらをもつ機能性を追求した。シェンベルクは音楽が聴衆の心理に与える劇的効果を排して音の論理だけを追求していつて、十二音階技法音楽を確立した。ウイトゲンシュタインは倫理や宗教と科学とをはっきり分けて、科学の言語をスリムかつシンブルにした。同じ精神が三人を貫いていたというのである。

シェンベルクには触れないが、ロースの建築に対する考え方とこの時期のウイトゲンシュタインの哲学の類似性を示すために、少し引用してみる。以下は、エゴン・フリーデルという世紀末ウイーンの俳優・詩人・歴史家という知的マルチタレントが当時のウイーンのブルジョワの家庭を描いたものだ。

彼らの家庭は居間ではなく、質屋や骨董屋であつた。そこに見られるものは、全く無意味な装飾品への熱狂であつた。……絹、縐子、ぴかぴか光る毛皮、金箔をかぶせた額縁、漆喰細工、金縁、べっこう、象牙、それに青貝への熱狂ぶりである。また幾筋もひびの入ったロココ式の鏡、ヴェニス風の多色ガラス、太鼓腹の古ドイツ風の壺、床いっぱいに敷いた、恐ろしい口をした毛皮の敷物、そしてホールに置かれた等身大の木製の黒

人像といった、全く無意味な装飾品への熱狂であった。また、あらゆるものが混合されて、全くわけが分からなかった。婦人の私室にはプール細工が一組、客間にはフランス帝国風の家具が一揃い、隣はルネサンス風の食堂、その隣はゴチック風の寝室といった具合。……リボンや縷糸や唐草模様がたくさんデザインしてあればあるほど、色がけばけばしく毒々しいほどよかったのである。こういった脈絡の中で明らかに欠けていたものは、実用とか目的とかいった観念である。つまりそれは純粹に見せるためだけだったのだ。驚くべきことであるが、家の中で最も具合がよく快適で風通しのよい部屋——〈最良の部屋〉——は、いやしくも生活するためのものでなく、友人に見せるためにそこにあったにすぎない。¹⁷

こうした実用品と芸術作品の混同、美と実用の混同を排除することがロースの仕事の意味だったと言える。今度はロースの言葉を見てみる。

建物はすべての人達に気に入れなければならない。このことは、誰にも気に入られる必要のない芸術作品と相違する点である。芸術作品とは芸術家の個人的なものである。ところが建物は違う。芸術作品は、それに対する必要性が何らなくとも、つくられ、世に送り出される。ところが建物は必要性を満たすものだ。芸術作品は誰にも責任を負う必要はないが、建物は一人一人に責任を負う。また芸術作品は、人を快適な状態から引き離そうとするが、建物は快適性をつくり出すのが務めである。芸術作品は革新的であるが、建物は保守的である……。かくして、建築と芸術とはなんら関係がないのではあるまいか、そして建築を芸術の一ジャンルに

加えることはないのではあるまいか？ 事実、その通りなのだ。¹⁸

さらに、ロースからもう一つ引用しておこう。

用途が文化の形式であり、物を作る形式であるとわたくしは言いたい。……テーブル・メーカーがかくかくのように椅子を作ったがゆえに、われわれはかくかくのように腰をかけるのではない。そうではなく、テーブル・メーカーが現にそのように椅子を作るのは、そのように腰をかけた人がいるからである。¹⁹

家具や建築の目的や機能をはっきり自覚することによって、美術品なのか実用品なのかどちらともつかない曖昧でわけのわからないものを、生活の実用の場から切り離すこと。これがロースの主張することだとすれば、その精神²⁰はワイトゲンシュタインの言語批判と軌を一にすることになる。ワイトゲンシュタインもさまざまな言語を区別して、学問から宗教や倫理や美の言語を排除しようとしたからである。ワイトゲンシュタインの『論理哲学論考』を読んでいて、なかなか理解できなかったが、ウィーンの文化状況やロースのこうした考え方に会って、筆者は少しワイトゲンシュタインが分かったような気がした。そしてロースとのこうした共通点は、ワイトゲンシュタイン自身の後期の哲学を解釈するうえでも、大変重要ではないかと思う。

七 言語ゲーム

ところでウイトゲンシュタインの哲学は、前期から後期にかけて変化したと言われている。前期と後期の境目は、いつごろなのか。それは彼が哲学を捨てて小学校の先生をしたり、ストンボロウ邸を建築したりしているころである。ウイトゲンシュタインは、一九二八年にこの建築を終えて見事に精神の危機を脱して、翌年一九二九年に再び哲学に戻っていく（だからお姉さんの治療は効を奏したわけだ）。それはとにかく、彼がその後言い出したことは主著『論理哲学論考』を真っ向から否定するようなことだった。これは周囲の人たちをびっくりさせた。当時ウイーンにはM・シュリックのもとに集まった科学哲学者たちがたくさんいて、いわゆる「ウイーン学団」というグループを作っていたのだが、この人たちが一生懸命考えてもうまく編み出せなかった論理学と科学哲学の完璧な理論をウイトゲンシュタインが提出したので、彼はこのグループやさらにはイギリスの同じような考えの人びとのいわば知的英雄だった。ところが、そのヒーローが卓越した主著で述べたことにまったく反する——と、この人たちは考えた——そんな哲学を語りはじめたから、彼らはびっくりしたわけである。周囲の人びとには、変節や転向、あるいは裏切りとさえ見えたその考え方とはどういうもので、なぜそんな反対のことを言い出したのか。実はウイトゲンシュタインは、自分のこの主著『論理哲学論考』についてある編集者に手紙でこう述べている。

この本のねらいは、倫理的なところにあります。……わたしの仕事はふたつの部分からなっています。この

本に書かれていることと書かれなかつたすべてとからなっているのです。そしてまさにこの第二の部分が重要な部分なのです。⁽²¹⁾

「書かれなかつたすべて」というのは先述の「ファンタジーの言葉」のことである。これには、倫理の言葉、宗教の言葉、芸術の言葉そしてさらに、もっと普通の言葉、つまり日常生活で使われている言葉、科学から見るとかなり曖昧で不正確な言葉などが含まれる。そういうものがこの本において重要だったというのである。とすればウィトゲンシュタインは、もっぱら科学者に有利なようにという意図でこの本を書いたわけではないことになる。ところがウィーン学団の人たちやこの本を高く評価した大方の人たちは、科学言語の万能を見事に説いている名著だと解釈してしまった。こうした誤解にウィトゲンシュタインは苦しんだが、やがて自分でも言語にかんする考え方を少し変えるようになってくる。

科学で使われる言葉は、実際に存在しているものを正確に写す記号だと述べた。それに対して文学や宗教や倫理で使われる言葉は、いわばファンタジーの言葉、何も写していない言葉であった。しかしこれらの言葉は何も写していないが、それでもまったく無意味な言葉だというわけではない。ハムレットは確かに歴史上実在した人物ではないが、しかし確かなんらかの意味でわれわれの世界に存在している。世界中の人びとがハムレットを読み、ほぼ毎日のようにハムレットは地球上のどこかで演じられていることだろう。イエス・キリストが本当に実在したかどうか、かりに今から二〇〇〇年ほど前に本当にいたとしても、どんな人物だったのかということが問題になる。最近歴史的なイエスの実像探しが盛んだが、かりにイエスが実在しなくても、あるいはたとえばマリアの処女懐胎

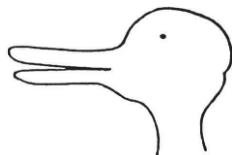
やイエスの復活がありえない——生物学的に見ればありえない——としても、そういう言葉の真偽（真とは言葉に対応するものが実在する場合。しない場合は偽となる）を確かめることに宗教の言葉の意味があるのではないだろう。天国、地獄、神といった非科学的で一見ナンセンスな言葉がいまだに生きているのは、それなりの意味があるからである。では、その意味は、どういうものと考えたらいいのだろう。あくまでも、それは科学の言語と混同されてはならない。それでいて、それらも同じく立派な言語と言えるのでなければならぬ。科学の言葉と文学や宗教の言葉をどうしたら同じく言語と言えるのか。ここでウイトゲンシュタインは「言語ゲーム」という考え方を持ち出す。

ゲームというものを考えてみる。たとえば、将棋、相撲、トランプ、サッカー、野球、何でもいいのだが、これはみなゲームである。ひとりでするゲームもあれば個人競技もあるし、団体競技もある。相手がある場合もあるし、ひとりで占いをするような勝ち負けのないものもある。これらもみなゲームと呼ばれる。これらに共通するのは何か。ほとんど何も無い。ただ、一つ一つのゲームに参加する人はそのゲームの言葉を使いそのゲームの規則に従わなくてはならない。それぞれのゲームで使う道具はそれぞれ異なるが、ときどき同じ道具を使って別のゲームを行なうこともある。たとえば碁石と碁盤で囲碁をする場合もあれば、碁並べをする場合もある。同じトランプでいろいろなゲーム（「ナポレオン」とか「ババ抜き」とか「七並べ」とか）をやる場合がある。それぞれ規則も違うし、場合によっては道具も違うこれらのゲームは、いったいなぜすべて「ゲーム」と言われるのか。それらに共通することがないのに、みな同じく「ゲーム」と言われるのはなぜか。ウイトゲンシュタインは「家族の類似性」（『哲学探究』第六七節）ということ、これを説明している。ちょうど、家族全員が、それぞれ違う人間なのに顔や体型や行動がどことなく似ていて、全体でひとつの家族を構成しているように、ゲームは相互に類似しているのだという

のである。しかし似ているからといって、家族のだけかひとりがいちばん偉く、あとは劣った者だというわけではない。

さてこれと同じことが、言語についても言える。つまりウイトゲンシュタインによると、言葉も一種のゲームだというのである。たとえば、物理学というゲームがある。これは物理現象をできるだけ正確に写すゲームである。生物学というゲーム（これも写すゲームだ）もある。またキリスト教というゲームもあるし、仏教というゲームもある。善悪という言葉を使うゲーム、つまり倫理のゲームもあれば、詩や小説という芸術のゲームもある。これらはみな言葉を使ったゲーム、言語ゲームである。それぞれのゲームにはそれぞれの規則がある。あるゲームに参加する人はその規則を守って、自分の「手」を打たなければならない、つまり個々の発言をしなければならないわけである。もちろん新しい規則を創造して新しいゲームを創るということもあるだろう。これまでであった言語ゲームが使われなくなることもあるだろう。このように言語ゲームは無数にあり、たえず変化している。こうした多種多様な言語ゲームの全体が、言語という家族を構成しているのである。

ところでここで重要なことは、これらゲームの間には優劣はないということである。科学がいちばん偉いゲームだということはない。それはちやうど、野球がサッカーより偉いことがないのと同断である。たくさんの言語ゲームの間に地位の上下はない。物理学や生物学のゲームが宗教のゲームより偉いわけではないのである。どのゲームにも特権はない。こうしてウイトゲンシュタインは初期に『論理哲学論考』で主張した考え方、つまり科学の言語だけが、つまりは写す言語だけが、言語として意味があるのだという考え方を改めることになった。ただしここでも初期の或る立場、つまり、あい異なる言語を厳しく分ける、という発想は受け継がれている。なぜならまったく違



うゲームを混同することは、ここでも許されないからである。たとえば生物学のゲームのなかでは、処女懐胎や死後の復活という言葉を使うのは規則違反である。しかしキリスト教というゲームでは、一向にさしつかえない。このようにそれぞれの言語ゲームを分けることが依然としてウィトゲンシュタインには重要だったのである。哲学の仕事は錯綜するたくさんゲームを解きほぐし、交通整理することだということになる。

それともうひとつ重要なことが、この言語ゲームという言葉に込められている。同じトランプで複数の別のゲームができると述べた。言葉についても同じことが言えるというのである。ひとつの言葉はひとつの意味でしか使用できないということではない。これはわれわれが眼でものを見るときにも言えることである。

たとえば左の図は、心理学でよく使われる図⁽²²⁾だが、われわれはこの図形を「あひるの頭」と見ることもできるし「うなぎの頭」と見ることもできる。言葉というのもそうであって、ひとつの言葉はさまざまな形で使うことができる。それはひとつの言葉が同時に多数の言語ゲームに属しているということである。ではその場合、われわれは、どんなふうにしてその複数のゲームを見分けるのか。ある言葉が、たくさん存在するゲームのうちのどのゲームで使われているかは、その言葉だけを見てもわからない。同音異義語のことを考えてみれば、

それはすぐ分かる。たとえばパソコンで「こい」という言葉を入力する。これを変換すると、命令文の「来い」、形容詞の「濃い」、名詞の「恋」、「鯉」、「故意」などが出てくる。「こい」という言葉が、これらのうちのどの意味を言い表しているかはこの語を含む文章、さらには（多くの文章の連なりである）文脈、さらにはアクセントの置き方、発言者の表情、またどんな場所どんな状況でこの言葉が発せられたかなどによって決定される。そうした

こと全部を「生活形式」(Lebensform)とウイトゲンシュタインは呼んでいる。同じ言葉でも違う生活形式のなかで使われると、違う意味になる。ワープロソフトはなにしろ愚かだから、文脈や、ましてや生活形式が分からないのである。

生活形式というと、何か難しい考え方のようだが、けっしてそうではない。これまでは宗教だとか倫理だとか文学などという極端な、というか、ある意味で特別な言語を引き合いに出したが、それほど特別な言葉でなくても言語ゲームは成り立つ。日常言語、つまりわれわれがつね日頃、普通に使っているかなり曖昧な言葉もひとつの言語ゲームである。たとえば先程「太陽が東から昇り西に沈む」という表現は正確ではなくて、非科学的な言い方だと述べたが、天文学のゲームではこの言い方はたしかに不正確だが、日常会話というゲームではこちらの言い方が正しいのであり、意味があるのである。たとえばデパートでわれわれが「そこにある赤いワンピースを見せてください」と言ったとする。それを小耳に挟んだ光学の専門家がいて、われわれにこう言ったとしたりどうだろう。「その〈赤〉という言い方は正確ではない。赤とは正確には、少なくとも六二〇ナノメートルから七五〇ナノメートルの波長の光線が、正常な眼の網膜にある視細胞を刺激し、この刺激が視覚系の伝送路を通じて脳の視覚中枢に伝わったときに生ずる色のことだ。だから多少省略してもいいけど、少なくとも六二〇ナノメートルから七五〇ナノメートルの波長の色のワンピースを見せてくださいと言わなければならない」と(ちなみにナノメートルは一〇億分の一メートル)。こうした言い方は実に滑稽だし、これはいわば正確すぎる言い方であって、結局は買物という目的を果たせない(『哲学探究』第八八節参照)。この光学者は間違っている。買物の言語ゲームのなかに、色を正確に写すというゲームを混入させているからである。さてここで、もう一度ロースとウイトゲンシュタインの考え方の類似性にお

つかる。つまりいまのような日常言語は不正確でも意味がある。いや不正確だからこそ意味があり、不正確だからこそ使えるわけである。この「使える」ということが重要である。もしも正確な言葉、科学的な言葉しか使っていないとなると、われわれの生活はきわめて不便なものになってしまふ。物と一致する言葉がではなく、他人に通用する言葉、つまり使える言葉が意味のある言葉なのである。「ある言葉の意味とは、言語におけるその言葉の使用である」⁽²³⁾とウィトゲンシュタインは述べているが、言葉がどんな意味をもつかはそれが生活のなかでどんな文脈で使われるかによって決まるといふことである。だからある言葉を理解するとは、(その言葉に対応するなんらかのイメージを心にもつことではなく)その言葉を使いこなすこと⁽²⁴⁾なのである。このような考え方のなかに、建物や家具は一定の役に立たなければ何もならない、使えなければ何もならないというロースの建築哲学と同じ精神を読み取ることができる。ウィトゲンシュタインは後期になつて言葉に対する考え方を変えたが、この精神はずっと持ちつづけていたと言える。

さて、ストンボロウ邸の完成後ウィトゲンシュタインはケンブリッジに今度は、先生として戻るのが、イギリスに移つてからは風変わりながらも順調な生活がつづいた。途中ソ連に移住しようと考えたり、ノルウエーの小屋に引きこもつたり、第二次世界大戦のときはロンドンの病院でボランティア活動をしたりしたが、おおむね大勢の学生に囲まれた順調な大学教授としての活動を送つた。そして一九五一年に膨大な遺稿を残して六二歳で亡くなる。死後出版された『哲学探究』(一九五三年)は、先述のように初期の『論理哲学論考』とはまったく立場を逆にしていた。『論理哲学論考』を称賛した人びとはこの著作にびっくりし反発する人もいたが、研究が進むにしたがつて人びとはどんどん『哲学探究』で述べられた「言語ゲーム」という考え方に共感していった。そしていまでは「言語

ゲーム」という考え方は、哲学だけでなく、多くの学問分野に影響を与えている。それは、人間が営むあらゆる種類の言語活動があるがままに平等に認めていこうとするこの言語観が、今日のように価値が多様化している時代に合っているからではないか。

いずれにしろ、このように前期と後期のそれぞれ「主著」と言われるこのふたつの著書は、立場が反対であるのに、いずれもいまだに大きな影響力を与えている。ウイトゲンシュタイン研究者の間ではこのふたつの本のどちらに重きを置くか、ふたつの主著の関係はどうなっているかをめぐってさまざまな議論が存在する。ウイトゲンシュタイン研究者ではないのでその辺のことは詳細にはわからないが、ただ、ウイトゲンシュタインの生涯を顧みみると、ストンボロウ邸の建築に携わったことは彼の哲学にとって存外大きい意味をもっていたのではないかと思う。

八 「住宅のかたちをした論理学」

ウイトゲンシュタインは気質から言うと、知の人と言うよりは作る人だったのではないか。物を作る人は作品を完成させるだけでなく、その制作過程から多くのことを学ぶものである。その結果、作者は完成した作品よりもさらに先に進むことになる。たぶんそれは、物を作る過程で作者自身も鍛えられるからなのだが、ウイトゲンシュタインに関しても同じことが言える。

ウイトゲンシュタインは『論理哲学論考』で、言葉をどこまでも論理的に精密にしていき、ついに、写す言葉から一切の曖昧さを排除してしまった。他方では、その哲学をそのまま建築に移したような、装飾を一切排除した精

密機械のような住宅を作り上げた。制作過程で他の人びととさまざまなトラブルがあったには違いないが、とにかく彼は制作時は我を通してしまったわけである。しかも当初ウイトゲンシュタインは完成した家の住み方にもかなり注文を付けていたらしく、カーペット、シャンデリア、カーテンも一切付けることを認めなかった。むしろ窓の金属、ドアの把手、スチームのラジエーターは何も塗られないまま、部屋の明かりは裸電球が付けられていたという有様である⁽²⁵⁾。彼にとつてこれこそ理想的な空間だったし、そうした使い方こそ意味のある唯一の使い方だと、少なくともその当時は考えていた。ところが、ミリ単位で計算され尽くしたこの家が本当に普通の人びとにとつて住みやすかったかという点、どうもそうではないらしいのである。ウイトゲンシュタインのもうひとりの姉にヘルミーネ・ウイトゲンシュタインというひとがいる。彼女はいささか戸惑いをこめてストーンボロウ邸を「住宅のかたちをした論理学」と呼んでいる⁽²⁶⁾。彼女はさらに、「あれは人間の家というよりも、神の家であつて、自分は計算され尽くされたこの家を称賛はするけれども、とても住む気にはなれない」と言っている⁽²⁷⁾。いくら装飾を排除すると言つても、このような家では住宅としてはいささか具合がわるかつたのかも知れない。あるいはウイトゲンシュタインの思い描く生活形式が余りにもモダンすぎたのかも知れないが、当時の普通の市民の声としてヘルミーネの嘆きも分かる気がする。ところでさらにすごいのは、この家を実際に使つたマルガレーテ・ストーンボロウ夫人である。彼女は、その家をおろうことかクリムトの絵、豪華な壁掛、骨董品を納めたガラスケース、装飾たっぷりの家具で満たしたという。これでは、ウイトゲンシュタインの建築の意図とは明らかに違つた使い方をしているように思えてならない。実際当時この家を訪れたある歴史家は、マルガレーテが使つていたこの家を、装飾と簡素、過剰と禁欲の奇妙な混合物だと呼んでいる。天井の高さを三センチ高くするために苦心した初期ウイトゲンシュタインから

みると、これは許せない使い方だということになるだろう。こうした反応や使われ方に接して、無論ウイトゲンシユタインは苦笑したり、あるいは腹を立てたかも知れないのだが、同時にそこから、数学的な精密さだけを追求することの滑稽さ、あるいは不十分さ（さらにはアイスバーンの上を歩くような危うさ）を感じ取ったのではないか。

後年ウイトゲンシユタインは、自分の造ったストーンボロウ邸について自己批判めいた文章を残している。

すべての芸術のなかには、野生の動物がいる——飼いな_らされ_ては_いる_が。……すべての偉大な芸術には、

人間の原始的な衝動が、通奏低音としてそなわっているものだ。……だがマルガレーテのためにわたしが造った家（ストーンボロウ邸）は、断乎たる耳ざとさの産物、お行儀のよさの産物、（ある文化等々に対する）大いなる理解の表現であるにしろ、根源の生命、存分に荒れ狂いたいと思う野生の生命が、——欠けている。ここには健全さが欠けていると言つてもいいだろう（キルケゴール）。（それは温室栽培植物なのだ）⁽²⁸⁾

ニーチェが吐露しそうな文言が並んでいるが、この引用からも分かるように、ウイトゲンシユタインは自分の作品を「お行儀のよさの産物」とか「温室栽培植物」と言い、そこにはワールドなものが欠けていると言っている。この言葉の真意はよく分からないが、こう解釈できるだろう。装飾を否定することが取りもおさず数学的な精密さだと自分は勘違いしていた。使用や機能を主眼にして住宅の建築を進めるにしろ、そこには多様な道が可能である。もっとワールドな形で住宅としての機能を追求することもできたであろう。生活空間も、そして言語も、さまざまなゲームの錯綜する場でありうるのではないか。論理学以外の別のゲームをモデルして、別の住宅を造ること

もできたのではないか。ウイトゲンシュタインは、もしかしたらそう考えたのかもしれない。

建築の直後に再び哲学に戻り、前期の言語観を否定して言語ゲームを唱えるようになったのは、そうした経験と反省があったからではないか。彼はあらゆるノイズを除去したピュアな生活空間を完成させたが、その過程でウイトゲンシュタイン自身のピュアな思想も鍛えられて成長し、少しずつ変わっていったのではないか。つねに実践を好み実践から多くを学んだウイトゲンシュタインのことだから、こうした推測も案外的外れではないかも知れない。そうだとすれば、ストーンボロウ邸の建築は、ウイトゲンシュタインにとって神経症の治療というたんに私生活上のエピソードにとどまらないもっと重要な意味をもっていることになるであろう。

注

- (1) 本稿は、一九九五年八月に「高山建築学校」で話した講演原稿に加筆して出来上がった論考である。なお「高山建築学校」の詳細については、趙海光・高山建築学校編集室編『高山建築学校伝説―セルフビルドの哲学と建築のユートピア―』（鹿島出版会、二〇〇四年）を参照せよ。
- (2) 建物の外観、内部の構造、設計図については、HAUS WITGENSTEIN Eine Dokumentation, Otto Kapfinger, Kulturabteilung der Botschaft der Republik Bulgarien, Wien, 1991. に詳しく掲載されている。
- (3) 以下の記述にあたっては、おもにW・M・ジョンストン『ウィーン精神1』（みすず書房、一九八六年）三―三頁以下を参考にした。同書がウイトゲンシュタインおよび世紀末ウィーンの精神状況を簡潔的確に浮き彫りにしているゆえんである。
- (4) 写像やその構造については滝浦静雄が平易で明解な解説を『ウイトゲンシュタイン』（20世紀思想家文庫6）岩波書店、一九八三年）四四頁以下で述べている。参照されたい。

- (5) この語にこゝつは Allan Janik and Stephen Toulmin, *Wittgenstein's Vienna*, (Elephant Paperbacks) Ivan R. Dee, Inc., Chicago, p.196 にある言葉 'fantasy' から着想を得た。S・トウルミン＋A・ジャンク『ワイトゲンシュタインのウィーン』藤村龍雄訳、平凡社ライブラリー、三三〇頁の邦訳も参照せよ。
- (6) Wittgenstein, *Tractatus logico-philosophicus*, 4. 003, Werkausgabe, Bd.1, Suhrkamp, S.26. 『論理哲学論考』四・〇〇三。以下、この版に従って訳し命題番号のみを示す。なお、むろんこゝで言う「哲学」は伝統的な哲学、つまりいわゆる形而上学のことである。ワイトゲンシュタインの考える正しい哲学とは、「思考可能なものの限界をさだめ、それにともない、思考不可能なものの限界をさだめなければならない。哲学は思考可能なものを通じて、思考不可能なものを内側から境界づけなければならない」(『論理哲学論考』四・一一四) という言葉から分かるように、まさにカント的なものである。
- (7) これらの芸術家を推薦し寄付を仲介したのは、クラウス主義者で雑誌 *Der Brenner* (火口) の編集者フィツカーである。詳しくは Ray Monk, *Ludwig Wittgenstein: the duty of genius*, Free Press, 1990, pp.106-110. を参照せよ。邦訳、レイ・モンク『ワイトゲンシュタイン』岡田雅勝訳、みすず書房(以下、モンク『ワイトゲンシュタイン』と略記)一一四頁以下も参照のこと。
- (8) Monk, *ibid.*, pp.581-586. (モンク『ワイトゲンシュタイン2』同上、六三九頁以下) を参照せよ。
- (9) 神の存在に関するいわゆる「不可知論」の立場を取りながらも、信仰を実践するワイトゲンシュタインのこうしたスタンスは、とくに Wittgensteinian Fideism (ワイトゲンシュタイン的信仰主義) と呼ばれる。これについては、カイ・ニールセン「不可知論」(『知の分光学』平凡社、所収)、およびその解説(拙稿)を参照されたい。
- (10) 意外なことだが、たんなる内的状態としての「信仰」ではなく「実践」こそが宗教の本質だとする見解をワイトゲンシュタインはニーチェからも学んでいる (Monk, *ibid.*, p.122. モンク『ワイトゲンシュタイン1』一三〇頁以下参照)。
- (11) なおこゝで単純化して「関係」と呼んだものは、『論理哲学論考』ではもう少し複雑でややこしい。一見なんの関係もなさそうな知覚と言葉、たとえば赤の知覚と「レッド」という言葉が、それでも関係することができるためには、両者はなにかしらか通するものをもっていなければならない。『論理哲学論考』では、実在とその記号は形式を共有するとされる。この形式が「論理的形式」(logische Form) と呼ばれる。つまりこゝで写し・写される「関係」と述べたのは、写されるものと写すものが共有する論理的形式のことである。

- (12) ウィトゲンシュタインは『論理哲学論考』四・一二で、「命題(=文)は実在のすべてを描き出すことができるが、実在を描き出すために実在と共有しなければならぬもの——論理的形式——を、描き出すことはできない」と述べている。しかしこの四・一二の命題自身が「描き出すことができない」ものを描き出す命題である。すなわち、実在を写さない命題なのではないか。してみると、これは無意味な文だということになる。そしてそのことを、彼自身もむろん気づいていた。この本の最後のほうでウィトゲンシュタインは、「わたしを理解する人は、わたしの(この本の)諸命題が結局は無意味なのだということを知るにいたる」(『論理哲学論考』六・五四)と述べているからである。
- (13) 『論理哲学論考』六・五三。
- (14) ウィトゲンシュタイン『小学生のための正書法辞典』丘沢静也・萩原耕平訳(講談社学術文庫)。
- (15) ウィトゲンシュタインは一九一四年七月に、前述のフィッকারの紹介でロースとはじめて会い直ちに意気投合している(Monk, *ibid.*, p.108. モンク『ウィトゲンシュタイン』一一六頁参照)。
- (16) Monk, *ibid.*, pp.147-153. モンク『ウィトゲンシュタイン』一五七頁以下参照。
- (17) Wittgenstein's Vienna, *ibid.*, p.97. (『ウィトゲンシュタインのウィーン』同上、一五七頁以下)。
- (18) アドルフ・ロース『裝飾と犯罪』伊藤哲夫訳(ちくま学芸文庫)一七七頁。さらにロースはこの本で、「文化の進歩とは、日常使用するものから裝飾を除く、ということと同義である」とも述べている(同書一二九頁)。
- (19) Wittgenstein's Vienna, *ibid.*, p.99. (同上、一六二頁)。
- (20) ウィトゲンシュタインはケンブリッジの自分の部屋に備える家具を選ぶにあたって「あらゆる裝飾を」排した家具を探すため凝りに凝つたらしい。その姿勢・精神について、モンクはその浩瀚な伝記で次のように述べている。「余計な裝飾に対するウィトゲンシュタインの強烈な反感を理解するためには——それが彼にとって重大な倫理的課題であったことを評価するためには——私たちは当時のウィーンの人になり、カール・クラウスやアドルフ・ロースと同じような実感をもたなければならぬ。彼らは、世界のどの文化にも優っていたかつてのハイドンからシューベルトに至る高貴なるウィーン文化が、十九世紀末以来、(偽って「高貴と」称された卑しい文化、高貴なる文化どころか、裝飾と仮面に誤用された文化)(パウ・エンゲルマンの言葉)へ衰退していった、と実感していたのであった」(Monk, *ibid.*, p.56. (モンク『ウィトゲンシュタイン』五八頁。本文と合わせるために訳文は少し変えてある)。

- (21) ウィトゲンシュタインが『論理哲学論考』の出版を依頼してフィッকারに宛てた書簡 (Wittgenstein, *Briefe an Ludwig von Ficker*, Brenner-Studien, Bd.1, O. Müller Verlag, Salzburg, 1969, S.35) にある言葉。
- (22) この錯視画 (ジヤストローの図形) は『哲学探究』の第二部 (Wittgenstein, *Philosophische Untersuchungen Teil II*, Nr.XI, Werkausgabe, Bd.1, Suhrkamp, S.520) で引き合いに出されている。この図形およびその由来と意味については Monk, *ibid.*, pp.507-509, (モンク『ウィトゲンシュタイン2』五六一頁以下) を参照せよ。
- (23) Wittgenstein, *Philosophische Untersuchungen Nr.43*, *ibid.*, S.262. (『哲学探究』第四三節)。
- (24) 「知っている (wissen)」という言葉の文法は、『*ウィッセン (können)*』『能力がある (instande sein)』という言葉の文法と明らかに近い親戚である。だが「理解する (verstehen)」という言葉の文法とも近い親戚である。(ある技術を〈使いこなすこと〉) (Wittgenstein, *Philosophische Untersuchungen Nr.150*, *ibid.*, S.315. 『哲学探究』第一五〇節) も参照せよ。
- (25) Monk, *ibid.*, p.237. (モンク『ウィトゲンシュタイン1』二五四頁)。
- (26) バーナード・レイトナー編『ウィトゲンシュタインの建築』(磯崎新訳、青土社) 四六頁 (本文に合わせるために訳文を少し変えてある)。
- (27) 同上。
- (28) Ludwig Wittgenstein, *Vermischte Bemerkungen*, Basil Blackwell, Oxford, 1977, S.77f. 引用文中の「(キルケゴール)」は「やや唐突で分かりにくい。この断章集所収の別の断片」あらゆる知恵は冷たい。鉄を冷たい状態では鍛えられないように知恵によってひとは生に秩序をもらすことはできない。……知恵は情熱を欠く。これにたいしてキルケゴールは信仰を情熱と呼んでいる」(*ibid.*, S.102) という言葉と考え合わせると、ここは「知恵はあるものの、情熱が欠けている」というほどの意味かもしれない。